資料３

平成 28 年(第 10 回)みどりの学術賞選考委員会
委員長コメント

平成２８年（第１０回）みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者約４００名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼しました。

その結果、延べ７３名の学識経験者の方々から、約６０名の候補者の推薦が得られ、多様かつ大変幅広い研究分野から、受賞に相応しい研究者のお名前を挙げていただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、林政学分野と藻類学分野で活躍されているお二人の方が受賞に相応しいとの結論にいたりました。

受賞者のお一方は、林政学の分野で、市民社会の共有資産すなわち「コモンズ」として日本の森林をとらえ直し、社会的協働による森林管理のあり方を示し、これを通じて、林業の担い手としての都市住民の参画の可能性、市民生活や教育の場としての森林の重要性など、森林・林業政策や森林と社会との関わりについて新たな方向性を示すなどの功績を挙げられた、三重大学名誉教授の三井昭二博士です。

もうお一方は、藻類学の分野で、植物プランクトンの一種であるハプト藻類が、ハプトネマと呼ばれる鞭毛のような細胞器官によって餌の粒子を細胞内に取り込むという動物的な栄養摂取を行っていることを発見したほか、植物になる進化の過程にあると考えられる重要な生物「ハテナ」の発見により、藻類をはじめとする生物の多様性を生み出した進化の道筋の解明に貢献するなどの功績を挙げられた、筑波大学特命教授の井上勲博士です。

受賞者お二人の研究は、学術的な観点から極めて優れた業績であるとともに、いずれも我々人類と「みどり」との関わりについて深く追求され、「みどり」をどのように理解し、活かしていけば良いのか、その道筋を示された研究として高く評価いたしました。

選考委員会を代表し、両博士の永年に渡るご研鑽に対し、心より敬意を表するとともに、このような「みどり」に関する学術が新たな知をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待し、念願するものであります。

平成２８年３月１０日

みどりの学術賞選考委員会委員長
石　川　幹　子